

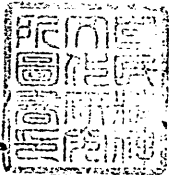
實 驗
日 本 修 身 書 卷 三
尋 常 小 學
生 徒 用

東京市立
尋常小學校
圖書部
藏

檢定合格本

K120.1
55
3

日八十月九年六廿治明
濟定檢省部文



三宅米吉校閱
中根淑
渡邊政吉編纂

實驗
日本修身書卷三
尋常小學
生徒用

東京

金港堂書籍會社



第一課 父母の恩

我が身は父母よりうけたれば、父母は、
我が身の本なり。其の上、我はうまれ
はじめより、父母の養育ヤウイクによりて、人となれり。うまると育てらるると二つの恩あり。其の恩の、おかく大いにしてきはまり

なきこと、たとへざるにものなり。よろづ
才サイ行カワうるは、くとも、孝にたふるかなれ
ば、其の餘ヨリはみるにたらず、故に人の子
たるものは、まづ父母に事ふるみちを早く
學びてしるべし、孝のみちにとるときは、
たろかなることのいたりなり。

第二課 孝行

むかー伊勢の國に
 萬吉といへる孝子
 あり父は早く死し
 母は病ひがちにて
 家業をいとなみかね



ければ、萬吉は、日日海道にいで旅人の
 にもつなどをになひ、貸錢をとりて、母
 を養ひ、且薬をもとめて母にすすめ
 孝行をつくりければ、人人あはれみて
 これをたすけたり
 父母に事へては、よく其の力をつつす。

第三課 孝行

市郎兵衛イチロウベエは、幼き時

よりよく父母のたふせ

をまもり又つねに

敬ウヤマひ尊ウヤトびて、かりうめ

にも、敬禮をかきたる



ことなり、朝は早くたきて、父のたきいづる
をまち、其の外に出づる時は、たくりむかへ
をなして、ねんごろにいたはりたり。

父母年老いてのちは、たほかた
かたはらさをはなれず、出入には、
手をひきうしろをかかふべし。

第四課 敦睦

一家の内は、ただおかなるをよー
とすことば、ただおひなをいなきやう
にふかくいまむべー。

小左衛門兄弟は、久しく一家にすみ家族
十七人ありけるが、行ひただしく交りあつかり

しかば、其の妻子供たちも、これをみならひ
兄の妻は、弟の妻を愛しみ、弟の妻は
兄の妻を敬ひ、年上のものは、幼きもの
をあはれみ、幼きものは、年上のものを尊び
家内きはめて睦かりしかば、其のこと
國主にきこひて、はうびをたまはりたり。

第五課 友愛

世の中ナカには、兄弟姉妹ほどたのもキきものなければ、兄弟姉妹は、弟妹を愛アイしみ、弟妹は、兄姉を敬ウヤひて、つねに睦ムツしく交るべし、もシ兄弟姉妹の中、ふシあはせにして、病ヤミひにかかり、さいなんにあふ

ものあらば、心をつくツクして、なぐさめあひ力をつくツクして、たすけあふべし。
たつ女は、つねに兄を大切にウヤしけるが、兄眼メをメやみて、盲目マウモンとなりたるのコトちは、殊更コトサラに心を用ヨウひて、之をいたはりたり。

第六課 朋友

善き友に交れば、善き人となり、
悪き友に交れば、悪き人となる。
は、恰も朱にてるむれば、赤くなり、
墨にてるむれば、黒くなるが如し。
されば、かゝるとき人をも、交る友を見て

其の人からを知る。といひ、又「善悪は
友を見よ」といひて、友を知らぶべき
ことををしへたかれたり。友を知らぶ
ことは、實に心を用ふべし。
交る友を見て、其の人からを知る。
善悪は、友を見よ。

第七課 交際

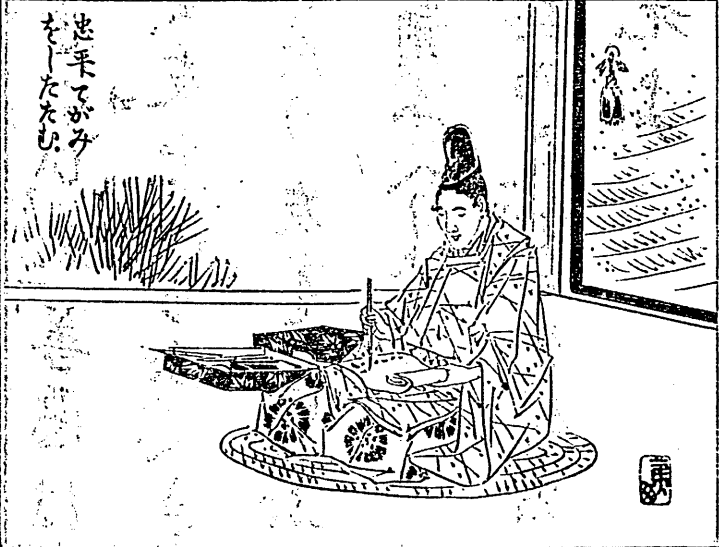
藤原忠平は、左大臣

時平の弟にて、常に

右大臣菅原道真と

交りあつた。道真

時平のためには、讒せ



られて、遠き國へりげられたるのち
 も、忠平は常に書をよせ、物をたくりて、
 其の心をなぐさめ、親み前日にかはらざり
 しといふ人の交りは、かくころありたけれ。
 信は心に誠あるなり、心に誠
 あれば、言行の上にあらはる。

第八課 禮儀

凡^{オヨ}ろいかなる人^ニにても、平生^{ヘイゼイ}心^ヲを用ひて、
 立ち居^{タチイ}ふるまひ^ヲをつつしめば、つひに
 慣^{ナラ}はしとなりて、殊^ニ更に心^ヲを用ひざる
 も、自ら^{オソカ}奥^{オウ}ゆかきふるまひ^ヲをなす人^ト
 なるなり、もつ常^ニにいぢきふるまひ^ヲを

なす時は、又同^クく慣^ハしとなりて、行儀^{キョウギ}
 よからざる人^トとなりには、か^ニに心^ヲを用ひ
 てあらためんとするも、たやすくは
 あらためがたし、故^ニに立ち居^{タチイ}ふるまひ
 は、つねづね、つつしむべきことなり。
 身^ヲは慣^ハし。習^ヒふより慣^ルる。

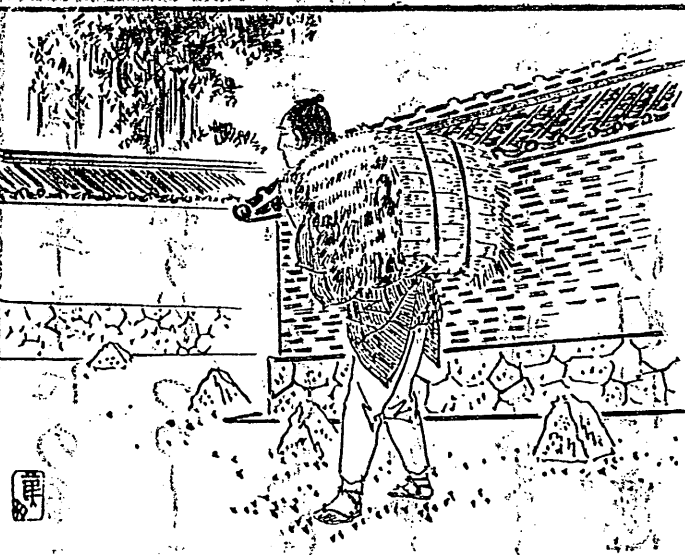
第九課 謙讓

才學をつつみてほこらず、富貴フウキをわすれ
て人をしのがざるものは、自ら奥ゆかしく
見ゆるものなり。

藤原忠實フヂハラノタカガサチは、つづつみふかき人なり、
年三十歳サイあまりにして、關白クワンハクの職シヨクに

のぼり、牛車ウシクルマにのることをゆるされ、たれ
ども、たろれつづつみみて、久しくのらざる、
四十一歳に及びて、はじめてのりたり。又
其の孫マゴ兼長カキナガ、家イヘからをたのみて、人にふれい
なり。かば、深フカくいまをくはへたりとぞ。
恭ウヤウヤしければ、患ウレへに遠トホざかる。

第十課 師恩



莊六は、いとけなく
して、たたみやに
ほうしょうし、其のわざ
をならひたり、のち
主人眼をやみて、家

しだいになれとろへければ、日ごろの恩に
むくいんとて、いよいよ業をはげみて、くら
しをたすけ、^{チンキ}年期あくるも、なほごどまり
て、ぬんどろに主人に事へたり。
父にあらざれば、生れず、^{シラシ}師にあらざれば、知ら
ず、故に父師に事ふること一の如くすべし。

第十一課 寛裕

細井平洲は心ひろく

してつろいみふかき

人なり或る時書生

某といふもの塾の

金を私しけるに



含容コンヨウにて問はず其の國にかへらんと

しける時シケルをシケルにシケルあたへあつくもてな

しかば某深く感カニ入り再びかへりきたり

てひるかに其の金をつくのひ且これより

大いに塾の利益をはかりとる。

人小過セウカクあらば含容コンヨウして之を忍シムべ。

第十二課 躬行

伊藤東涯は行ひ正しかりし人なり。人若し東涯に向ひて「某は、かくかくの悪事を爲したり」といふば、「人を誅するは、悪きことなり」とて、更に取りあはず。又「某は、かくかくの善事を爲したり」といふと語れば、「人をほむる

は、善きことなり」といひて、共に其の事をほめたり。又或る時、人に語りけるは、「行儀を修め、生産を治め、身體を保つこの三つのものは人の道の立つ本なり」といひて、親らも之を勤め、人をも之にみちびきたりといふ。其の善をあげよ。其の惡をたれ。

第十三課 思慮

萬づの事つらつら思案して後のあやまりなく悔いながらんことをはかるべし。

板倉重宗重昌といふ兄弟のもの主人徳川家光より裁判のさばきかたをたづねられけるに、弟重昌は直ちに答へたれども、兄重宗は

二三日のいうよをこひて同くことを答へたり。

後其の父勝重家光に見ゆ時家光この事を語りければ、勝重は「思慮足らざれば後悔することあり、まゝて裁判の事は猶更心を用ふべきことなり」といひしとぞ。後悔さきに立たず。

第十四課 積密



野田文藏は算術の達人なり。或るとき大岡忠相、まねまよせて百を二つにわれといひけるに、かるがる

しくことたへず、もうるばんをかりうけて、ていねいに計算を為し、五十なりとことたへければ、忠相大いに感心し、「かくてこそ、大切の役目をまがすに足れるなれ」とて、勘定役といへる重き職をさづけたり。念には、念を入れよ。

第十五課 儉約

用をつづまやかにすること其の益甚だ多し。

儉約ケンヤクなれば奢オゴらず情オコクらずして其の徳トクを養ウふ

べし。儉約ケンヤクなれば食味シヨクミ淡スくして身ミを損ソコナはず

生ナマを養ウふべし。儉約ケンヤクなれば人ヒトに求モトむることな

して廉レンを保ホつべし。儉約ケンヤクなれば人ヒトと利リを争マは

ずして恨ウラみに遠トウざかるべし。大かたの人の

習ナひつづまやかなるを弛ユルべて奢オゴらんこと

は易ヤスく奢オゴれるを止めつづまやかにする

ことは難カタし然シカれば家イヘを治シめ子孫シソンに傳ツタふ

るの法ホウ儉約ケンヤクにニくものなり。

節儉セツケンは人の美徳ビトクなり。

第十六課 節儉

日根野某ヒノノナニガシといふ人あり

たる金を返さんとして

黒田如水クロダジヨースキのもとへゆき

けるに、折ヲりやー或る

人より、一つツのたひを



たくりと一たり。如水其の中たちをすひもの
にして、日根野をもてなしければ、日根野は、
心の中に、其の吝嗇シソクをいやし、みしが、金を
返すに及び、如水ヲは、進上シンジヤウせしつもりなり。
とて、受け取らざりしかは、深く感カ入りとぞ。
積ツんでよく散サシず。

第十七課 慈仁



人に施しては念ふべからず。武助といへる人は勤儉にして、慈悲の心深く、貧乏きものには陰に米を恵み

て、「人に語るながら」といまいめ、衣服を施しては、「心にまかせぬこと多い」といへりくたり、金をかりたいとこふもあれば、快く貸し與へて、利子を取らざりき程なく、其の事領主にきこゆれば、米若干を賜はりたりとぞ。陰徳あるものは、陽報あり。

第十八課 仁恕

堀秀政は、思ひやりふかき人なり。或る時、
 士民其の政を「アツク」に自らあらためて、
 之をどがめず。又人夫の「荷物重くて、になひ
 かた」といへるを聞き、自らもちこころみ
 て、荷物の目方をへらしたり。又軍にのづみ

ける時、旗もちをはるかにたぐれば、「これ
 我が馬の早きゆゑなり」とて、あゝの
 たぐき馬にのりかへたりといふ。之を見
 ても、其の平生を知るべきなり。
 己の欲せざるところは、人に
 ほどくすことなかれ。

第十九課 立志

人の一生は、志の
大小によりて、初めより
大方定るものなれば、
少年のものは、其の
志を高く且大いに



し、着實に事を行ひて、末の榮はをはかる
べし、苟も疎放にして勤めず、卑小にして
自ら侮るが如きことあるべからず。
毛利元就は、幼くして大いなる志をいだき
しが、遂に山陰山陽十箇國の領主となりたり。
志を立てることは、大いに高くすべし。

第二十課 勤勉

昔京都ムカシキョウトに、圓山應舉マルヤマオウキョウといへる畫工ガクシヨウあり、エカキ「生き物の姿スガクを寫ウツすは、手ぢかの物より始むるに、アかす、アとて一年餘りの間、ア日日祇園ギヨウエンの社ヤシロにゆきて、雞ニをながめたり、カシやがて之を額カシに畫エガき、其の社ニに納めヲセ、ひろかに人人の評ヒヤクをききけるに、或る

日、野菜賣りの翁オキナ之を見、雞ニの傍カサラに草クサを描エガかざり、オシ尤も妙なりオシといひければ、應舉オウキョウすみやかに翁オキナをとひて、くはくらの事をたつねたりとぞ。應舉オウキョウは、かくの如くつとめはげみて、怠らざり、オシかば、遂に名高き畫工ガクシヨウとなりたり。
為さずんば、なんぞ成らん。

日本修身書 卷三 金澤市三書齋會社

明治廿六年六月十日印刷
同 年六月廿七日發行

定價金五錢五厘

渡邊政吉

本郷區森川町壹番地
金港堂書籍會社

日本橋區本町三丁目十七番地
金港堂書籍會社社長

原亮三郎

下谷區龍泉寺町四百十番地
金港堂

大阪市東區南本町四丁目
金港堂

宮城縣仙臺市國分町五丁目
大西鍊三郎

澁町區有樂町三丁目壹番地
三協舍員

三協舍
京橋區弓町廿四番地

版權所有



著者

發行者

代表者

賣捌所

印刷者

印刷所

實日本修身書卷四
尋常小學生用

教 第一九號
明治二十九年
一月十四日買入
北河内小學校

檢定合格本

K120,1
55
4